英語圏現代女性文学における老い

■ 教養力育成センター 教授 原田 寛子

○ 研究分野：英語圏文学、文学一般
○ キーワード：英語圏文学、エイジング、老い、女性文学、日本文学、現代小説

研究概要

研究概要

高齢化が進み「老い」に対する認識を再考する必要がある現代において、老いをどのように受け入れていくかは重要な課題である。人種、階級、ジェンダーに加え、年齢もまた差別を生み出すカテゴリーとして理論化される必要がある。本研究では、歴史的・文化的背景に照らして、どのように「老い」が構築され、認識されていくのかを考察する。そして、否定的・肯定的な複合的な要素を含む、老いの多様性を文学作品を通じて明らかにする。研究対象として主に英語圏現代女性文学の作品を取り上げ、現代日本文学の作品との比較も交えながら考察を深める。

社会のなかで、老いによって女性には二重のマージナリティが与えられることは議論されている。伝統的に付された女性の役割を重視し、女性の価値を美や若さに置く社会的・文化的背景はいまだ根強くあり、女性たちもそのような規範にとらわれている。このような根強い社会的規範を再考し、社会や家庭、個人など様々な視点から考察し、高齢女性に対する新しい文化的モデルをフィクションを通じて構築する。

研究方法

・社会的・文化的文脈の中で構築される女性の老いの表象とその問題点を明らかにする。
・文学作品を通じて描かれる女性の老いの在り方を、以下の点に着目して考察する。
　・新たな自己の確立
　　老いる過程で経験するアイデンティティ・クライシスと自己再構築のプロセス
　・共同体における役割
　　家庭や共同体における老いの役割と意義の見直し
　・自然との関わり
　　女性、母親、妻という社会的役割を超えた存在として、高齢女性が発する自然への訴え
・文学を通じて提示される老いの多様性を異なる文化圏の作品において比較する。

対象作家
Margaret Drabble、Hiromi Goto、Doris Lessing、Margaret Laurence、小川洋子、梨木香歩など

利点特徴

・否定的、悲観的に捉えられがちな老いを前向きに捉えることで、老いに対する人々の意識を問い直し、変化を促す。老いのあり方の多様性を認識することで、高齢化社会との向き合い方を考え直す一助となる。
・物語は単なる作り話ではなく現実世界を反映するものとし、教育の現場や人々の意識改革に役立つ、フィクションに内在する可能性を引き出す。

応用分野

老いに対する認識の変化は、子供、外国人、障害をもつ人など社会におけるマイノリティや弱者とみなされる者への理解を深めることにつながる。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS